

小学校教育へ鍵盤ハーモニカの普及を導いた楽器製造会社の戦略

－ 1960 ～ 70 年代における音楽教育雑誌の広告記事に着目して －

(平成 28 年 8 月 30 日提出, 11 月 4 日受理)

The Strategy of Musical Instrument Manufactures in Japan that Led to Widespread Introduction of the Melodica into Elementary School Education: Analysis of Advertisements and Articles in Music Education Magazines during the 1960s and 1970s

神戸女学院大学 (非常勤講師)

筒井はる香

TSUTSUI Haruka

Kobe College (Lecturer)

キーワード：鍵盤ハーモニカ，初等教育，音楽雑誌，楽器製造会社

Abstract : The purpose of this paper is to shed light on one aspect of the introduction of the melodica into elementary school education in Japan, by clarifying the improvements that took place in the manufacturing process of melodicas during the 1960s and 1970s, focusing on articles and advertisements in music education magazines. After melodicas were first imported from Germany around 1961, musical instrument manufacturers in Japan also began to manufacture and improve them. Educators in elementary and junior high schools soon began using the melodica experimentally, praising its musical possibilities but demanding improvements in quality.

Musical instrument manufacturers immediately set out to improve the quality of the instrument in collaboration with elementary schools. As a result, in 1967, the melodica was approved as an educational tool by the Ministry of Education. Further, with an increase in the number of school children and the corresponding shortage of music rooms and equipment in elementary schools, when the Ministry revised its national curriculum guidelines in 1968 and stipulated the scope of “basic” education, the melodica was considered a useful instrument for the attainment of this basic education, and elementary school students throughout Japan were soon carrying their personal melodicas. This paper shows that musical instrument manufacturers played a large role in the process leading up to the widespread introduction of the melodica into elementary school education.

Keywords : melodica, elementary school education, music education magazines, musical instrument manufacture

1. 研究の目的

本論文の目的は、1960 年代から 70 年代にかけての鍵盤ハーモニカ製作の改良を、音楽教育雑誌に掲載された記事や広告を通して分析し、小学校への鍵盤ハーモニカ¹導入史の一端を解明することである。

鍵盤ハーモニカは、マティアス・ホーナー（1833-1902）が創業したハーモニカとアコーディオン専門の楽器製作会社ホーナー社で 1957 年に発明され、「メロディカ」という名で売り出された。それ以来、欧米を中心にジャズやポピュラーや現代音楽の演奏者たちによって愛用されてきた。これに対して、アジア、とり

わけ日本においては、1960 年代以降、小・中学校で教具として用いられ、近年では小学校の他、幼稚園や保育所で鍵盤ハーモニカを用いた音楽活動が展開されている。

小学校における鍵盤ハーモニカの導入と楽器産業については、近年、研究が盛んに行われつつある。例えば、鍵盤ハーモニカの導入過程における指導の特質と役割(山中 2016)、また戦後の教育用楽器の開発に楽器産業が関与したことを示したもの(嶋田 2010)、戦後の器楽教育と楽器産業の一体性を明らかにしたもの(檜下 2015)などがある。本論文は、これらの先行研究に学びつつ、鍵盤ハーモニカの変遷、すなわち

1960年代に新しく登場した鍵盤ハーモニカが文部省から教具と認められるまでの間、どのような改良や変化が施されたのか、それらはどのような背景で行われたかを明らかにすることを目的としている。

研究の方法は、主に音楽雑誌に掲載された広告記事の分析である。1962年から1974年までの約12年の広告を丹念に調査すると、楽器の種類、音域、価格、改良などの変遷だけでなく、どのような背景でそれらが変化していったかという楽器製作会社の戦略や、当時の器楽教育の状況までもが映し出されていると考えられるためである。なお、本論文で調査したのは、1956年12月に創刊された日本器楽教育連盟発行の『器楽教育』第3巻第1号(1960年1月)～第9巻第3号(1966年3月)およびその後継誌である『音楽教育研究』(以後、『教育研究』と称す)第1号(1966年5月)～第98号(1974年6月)である²。日本器楽教育連盟は、器楽教育の研究を進める際に「楽器製作・販売関係者の協力」の必要性を説いていたことから(檜下2014)、同連盟が発行する音楽教育雑誌においても、楽器製作と器楽教育の関連性を考察する上で重要な手掛かりを掴めるのではないかと考えた。それゆえ本論文では、『器楽教育』と『音楽教育研究』を主な調査対象とした。

2. 鍵盤ハーモニカの実験的導入

国内で鍵盤ハーモニカの製造・販売が開始されて以来、この楽器は小学校や中学校の合奏クラブで実験的に使用された。例えば、1962年8月発行の『器楽教育』には、東京都世田谷区立池尻小学校で「新しい楽器ピアニカもサッソウと登場」と器楽学習の時間に鍵盤ハーモニカが用いられたことが写真入りで報告されている³(図1)。また、同誌1964年8月号には、福島県白河市立第一小学校の合奏クラブの様子が紹介され、従来から使われていたアコーディオンに加え、コントラバスと鍵盤ハーモニカが購入されたことにより充実した合奏ができるようになったことがアピールされている⁴。

これらの報告と並行して、『器楽教育』には、鍵盤ハーモニカの有用性を問う内容の記事が表われる。最初の例として挙げられるのは、1962年『器楽教育』6月号に掲載された特集「指導要領に示されていない特殊な楽器の活用とその可能性」である。ここでは、特殊な楽器として、ウクレレ、ギター、ハープ、エレクトーンと共に鍵盤ハーモニカが取り上げられている。当時、栃木市立大宮中学校の教諭だった石崎努は、合

奏クラブでこの楽器を使用した経験に基づいて次のように述べている。

「メロディオン・ピアノホーン・ピアニカ等の有鍵ハーモニカは、ハーモニカの欠陥をよくおぎなっている秀れた楽器である。何と云っても鍵盤があり。[ママ]出す音を眼と指で確められることは、教育上非常に有利なことと思う。予算の少ない学校ではデスクオルガンの代りに備えたら随分役立つことと思う」⁽¹⁾

石崎は、従来から使用されているハーモニカの弱点を挙げ、鍵盤ハーモニカはこれらを補うことのできる楽器と捉えている。彼の考えるハーモニカの弱点とは、吹音・吸音のコントロールが困難、出する音を目で確かめられないなどの奏法上の問題や調性が限られるなどの音楽上の問題である。実は、上記のことは石崎に限らず、同時代の多くの教育者によってたびたび指摘されていたことであった⁵。石崎の発言のなかで特に注目したいのは、ハーモニカでは「和音が出来ない」という指摘である。ここには、鍵盤ハーモニカの、ハーモニカにはない鍵盤楽器としての特性が明確に認識されていたことが明確だからである。

次に挙げるのは、1963年『器楽教育』11月号に掲載された座談会「有鍵ハーモニカの長・短をさぐる」である。この座談会では、東京都教育庁指導主事の青木由之介が司会を務め、4人の小学校教諭、千代延尚、川井勇、朝生朝正、小沢秀雄が参加した。彼らの意見に共通しているのは、鍵盤ハーモニカの音楽的有用性を高く評価していたことである。例えば、朝生の発言を見てみよう。

「ピアニッシモからフォルティッシモが割合簡単にでき、特別な技術もいらないし、弱く吹いても出るし、音もいいし、さっき言ったように、リズムをきざんでもいいし、ちょっとオーバーな言い方かもしれないですけども、一つの革命じゃないかという気がするのです(傍点は筆者による強調)。」⁽²⁾

「革命」とはやや大袈裟な表現であったかもしれないが、朝生が鍵盤ハーモニカに楽器として手応えを感じたことは確かである。続けて川井は、鼓笛隊において鍵盤ハーモニカを小太鼓の代わりに使用した際のことを語っている。

「ステージ演奏の際に、小太鼓を減らしてピアニカ

を入れ、これにリズムを取らせ、ダブルタンギングを使うと、ちょうどクラリネットと同じような効果が出る。ピアノカにリズムを取らせることは効果的だったと思う」⁽³⁾

座談会の他の参加者によっても、鍵盤ハーモニカにはリズムや和音奏において有用性があることが証言されている。以下、対談を抜粋する。

川井「僕はこの楽器は、どうも主役に使う楽器ではないと思うんです。いいわき役がでたというふうに考えています。たとえば、音色に特色があっていいとは言ってもやっぱりアコーディオンなんかにはかなわないと思います。わき役としての和音のリズム奏がいい」(中略)

朝生「もちろんこれはメロディーを歌わせる楽器として第一に考える、これは異存ありません。でも、リズムというのは、このごろやっと発見したんですが、打ち出しの半分に、トゥトゥトゥとやってみたんです。そうしたら、予期しなかったような音が出たんです。和音を押さえていて、ぜんぜんなんの意図もなく、笛と同じ形でいたずら半分にトゥトゥトゥとやっていたら、実にいい音が出まして、これは使えると思ったんです」

川井「非常に不協和音がいいですよ」

青木「和音リズム奏が可能であるということですね」(傍点は筆者による)⁽⁴⁾

その一方で、製作過程に改良の余地があることも全員が認めざるを得ないことだった。具体的には、鍵盤が動かなくなったり、鍵盤が飛び出してきて音が鳴りっぱなしになるなど故障が多いこと、ピッチが狂いやすいこと、修理に出すと一ヵ月以上がかり、修理代も高額であること、楽器の価格が高いことなどが挙げられている⁶。そのため、鍵盤ハーモニカが全国の学校に個人持ちの楽器として導入されるには時間を要すであろうことが暗に示されていた。

楽器の品質に改善の余地があるという意見は他の教論によっても異口同音に述べられていた。例えば、『器楽教育』1965年2月号には「けんばんハーモニカがもっとけんろうで音質、音色がよければ全児童にもたせて音楽教育の効率をはかりたい」⁽⁵⁾とある。さらに、『音楽教育研究』1966年2月号において、青森県の小学校教諭三浦広治は、鍵盤ハーモニカが個人持ちできるようになれば音楽の喜びを味わい、学習効果が上がる

と期待できるが、「ただし、その場合でもできるだけリードや音程に故障がこないような構造であることはいうまでもない」⁽⁶⁾と指摘している。

以上をまとめると、1960年代半ば頃まで、鍵盤ハーモニカは、優れた性質を備えた楽器ではあるが、品質の向上のために改良が必要という見方が優勢だったといえる。

それでは次に、文部省に教具とみなされるまでの間、具体的にどのような改良が行われ、どのような変遷を辿ったのかを音楽雑誌に掲載された広告を分析する。

3. 鍵盤ハーモニカの広告記事

3-1 掲載の頻度

鍵盤ハーモニカの広告を調査したのは、『器楽教育』(1960年1月～1966年3月)の全87号と、後継雑誌『教育研究』(1966年5月～1974年6月)の全98号を合わせた185である。

まず目を引くのは、『器楽教育』と『教育研究』とでは鍵盤ハーモニカの広告の掲載の頻度に大きな開きがあることである。前者で鍵盤ハーモニカの広告が確認できたのは、87のうち6つの号のみで、いずれも鍵盤ハーモニカが各社で開発された直後の1962年ないし1963年に集中している。具体的には、トンボ楽器のピアノホーン、日本楽器製造株式会社／東海楽器製造株式会社(以後、日本楽器と称す)のピアノカ、鈴木楽器製作所(以後、鈴木楽器と称す)のメロディオンである。ほとんどは表紙のグラビアページもしくは裏表紙に単色カラーか白黒で印刷されているが、稀に記事の間に挿入されていることもある。広告のサイズは、縦10.3×横14.7cm(一部10×13cm)で一頁に二社の広告が掲載されている⁷。

内容については、広告のキャッチコピー「吹奏楽器のニュー・フェースを!!」(図2)、「学習効果 満点!!の新製品」(図3)、「みんなに鍵盤楽器を!!」(図4)のように、国内で新しく開発された楽器をアピールするようなものが目立っていた。なお、1962年と1963年を除く他の号のグラビアページで多くを占めていたのはハーモニカだった。

一方、『教育研究』では、98のうち79の号に鍵盤ハーモニカの広告を確認することができた。これは全体の約8割を占める数であり、『器楽教育』と比較すると掲載される頻度が高くなった。掲載されていたのは日本楽器のピアノカと鈴木楽器のメロディオンで、トン

ボ楽器のピアノホーンの広告は一度も見当たらなかった⁸。広告の内容やデザインは、毎号で変わるわけではなく、同じものが色を変えて使用されることが多い。『教育研究』の広告のサイズは、縦 17.2 × 横 11.4 cm で、『器楽教育』よりも大きくなり、一頁につき一社の製品が紹介されるようになった。同時に、『器楽教育』のほぼ毎号のグラビアページを占めていたハーモニカの広告は、『教育研究』ではほとんど見られなくなる。

『器楽教育』に比べて『教育研究』に鍵盤ハーモニカの広告が増え、ハーモニカの広告が減少したことは何を表しているのだろうか。真っ先に考えられることは、1962 年以降、鍵盤ハーモニカが改良され、小・中学校への普及が進んだこと、それに引き換え、ハーモニカの学習が徐々に衰退していったことである。ただし、鍵盤ハーモニカが「個人持ちの」楽器になるまでには、楽器メーカーによる継続的な努力が必要であった（これについては第 4 章で詳述する）。

3-2 楽器の改良

1960 年代半ばまで、鍵盤ハーモニカが故障しやすい点が現場の教諭らによって指摘されていたことは、すでに第 2 章で述べた通りである。従来の鍵盤ハーモニカは、吹いている間に内部に唾がたまりリードが錆びやすく、結果として音質や音色の低下、あるいは楽器の故障を招く原因の一つとなっていた。そのような状況を反映してか、1966 年以降、リードが改良され、新しくなったことを強調した広告が目立つようになる。

『教育研究』1966 年 5 月号のには、「メロディオンのリードは抜群！！」⁽⁸⁾ という見出しで鈴木楽器がリードの開発に成功したことが大々的に記されている（図 5）。日本楽器もまた、「リードの特性を生かした美しい音色と豊かな音量」⁽⁹⁾、「軽い息で楽に音を出せる特殊リード」⁽¹⁰⁾、「特殊合金（燐青銅）」⁽¹¹⁾ のリードを完成させて音色の質、楽器の耐久性を高めたことが記されている。

また両社とも、吹き口の形を改良することによって吹きやすさを追求していた。鈴木楽器のメロディオンは、1963 年当時からすでに短めのプラスチックの吹き口と、パイプがついた吹き口の二種類の吹き口があり、卓上用と行進用など用途に合わせて取り換えられるようになっていた。

日本楽器のヤマハピアノカもまた吹き口の改良に取り組む、『教育研究』1970 年 8 月号には楕円形の吹き口にしてタンギング奏法を容易にしたことが記されて

いる。さらに、同誌 1973(昭和 48)年 12 月号には、リコーダー形を採用し、より吹きやすい吹き口に改良したことが掲載されている。

3-3 種類・音域の多様化

現在、小学校で使われている鍵盤ハーモニカの音域は、2 オクターヴ半のアルト (f-c^{'''}) が一般的であるが、1960 年代前半に発売された当初の音域はメーカーごとに異なっていた。

トンボ楽器のピアノホーンは f から f^{'''} (2 オクターヴ) のソプラノの音域を備え、日本楽器のピアノカは g から d^{'''} (2 オクターヴ半) のアルトの音域を有していた⁹ (この音域の楽器は後に「ピアノカ 36」と名付けられて販売された)。また鈴木楽器のメロディオンは f から d^{'''} (2 オクターヴと 6 度) および f から e^{'''} (2 オクターヴと 7 度) とアルトからソプラノの音域を備えた楽器を製造していた¹⁰。

1962 年以降の広告を通してみると二つの特徴が認められる。第一に、各メーカーで音域の種類が増えていくことである（トンボ楽器の広告は 1966 年以降見当たらないので、ここでは日本楽器と鈴木楽器を考察の対象とした）。

日本楽器では、「その用途も、音楽の授業、クラブ活動、コンクールとバラエティが豊富」⁽⁷⁾ という謳い文句が示すように、用途に合わせた種類の豊富さを売りにしていた。『教育研究』1966 年 2 月号には、先に挙げた「ピアノカ 36」に加え、「ピアノカミニ」、「ピアノカ 22」、「ピアノカ 25」、「ピアノカ 32」、「ピアノカ 34」の 5 種類が掲載されている。なおピアノカの後に付いている数字は鍵盤の数を表している。すなわち「ピアノカ 22」は 22 鍵である。

当時、「教育楽器のアイドル」というキャッチコピーで中心的に売り出していたのは、f から f^{'''} の 2 オクターヴの「ピアノカ 25」だった。また、「ピアノカ 34」は f から d^{'''} (2 オクターヴと 6 度) と広い音域をもち、「器楽合奏からジャズまで広範囲のジャンル」に適用できる楽器だった。さらに『教育研究』1967 年 8 月号には、新発売としてロックアンサンブルのための「エレクトリックピアノカ」が掲載されており、用途に合わせた多様な鍵盤ハーモニカが作られていたことが分かる¹¹。

鈴木楽器もまた 1966 年以降、複数の種類の鍵盤ハーモニカを広告に掲載している。『教育研究』1966 年 12 月号には、新製品として f から f^{'''} の「M-25」(ピアノカ 25 と同じ音域) と、g から a^{'''} のアルトの音域を備

えた「A-27」とg'からa'''のソプラノの音域を備えた「S-27」が掲載されている¹²。このように用途に合わせて音域の種類が増えたことが第一の特徴として挙げられる。

第二の特徴は、1967年以降、学習用の鍵盤ハーモニカに絞った広告が目立つようになることである（この点は、次項の「価格の変動」とも関連する）。日本楽器では、『教育研究』1967年8月号に初出されたヤマハのブランドの「ピアノカ 22」がそれにあたる（図6）。音域は、g'からe'''の1オクターヴと6度で、スタンダードの2オクターヴよりも狭い。広告には、楽器を両手で抱える少年の写真が中央したにあり、その横に「幼稚園の鼓隊でも——小学校低学年の合奏でも！」⁽¹²⁾というキャッチフレーズがあり、対象とする年齢層が低くなったことが分かる。さらに説明は次のように続く。

「幼児のかわいい指からもなめらかな旋律が流れます。（中略）愛らしいホッペからも十分な音量が溢れます」⁽¹³⁾

このことから「ピアノカ 22」は幼児の細く柔らかい指、少ない呼吸量でも容易に演奏できる児童向けに改良された楽器であることが明らかである¹³。

一方、鈴木楽器では、『教育研究』1969年11月号に初出された「メロディオン スタディ 25」が、学習用の鍵盤ハーモニカに相当する（図7）。この広告には、「ハンディタイプの学習楽器」⁽¹⁴⁾というキャッチフレーズのもと、品質、性能共に充実した教育的機能に優れていることが明記されており、実際に1960年代後半から全国の小学校で個人向けの楽器として採用され始めたメロディオンもこのタイプだった。

3-4 価格の変動

表1は、鈴木楽器メロディオン（スタディ 25）と日本楽器ピアノカ（ピアノカ 25, 32, 34, 36）の「価格の変動」を示したものである。広告のなかには、楽器の価格を表示していないものもあるので、ここでは価格の推移が分かるモデルのみを対象とした。

この表から分かることは、特定のモデル、すなわち「スタディ 25」と「ピアノカ 25」のみ値下がりをしてしているが、その他のモデルは全般に値上がりの傾向があることである。メロディオン「スタディ 25」は（1966年時点では、この名前で販売されていなかったが）2,800円だったが、3年後には1,980円に値が引き下げられている。ピアノカ 25は、1966年には3,000円で販

【表 1】

メロディオン（スタディ 25）とピアノカの価格の変動

年	S-25	P-25	P-32	P-34	P-36
1962	—	—	—	—	3,500
1966	2,800	3,000	3,800	4,500	3,800
1967*	2,800	3,000	3,800	3,800 4,500	3,800 5,400
1969	1,980	3,000	3,950	4,500	5,400
1970	1,980	2,000	3,950	4,500	5,400

（『器楽教育』および『音楽教育研究』に基づき、筆者が作成）*1967年のP-34およびP-36は2月と同年10月の価格を示す。

売されていたが、鈴木楽器「スタディ 25」の大幅な値下げに続き、1970年7月には2,000円まで価格を引き下げている。

それに反して、ピアノカ 32, 34, 36はすべて値上がりの傾向が見られ、決して安価とは言えない。例えば「ピアノカ 32」は、1967年10月には3,800円で販売されていたが、6年後には4,750円まで値上がりしている。

1965年頃から大型の高度経済成長時代が始まり、その間に物価が上昇したことを考え合わせると、ピアノカの価格の値上げは自然なことと考えられる。むしろ、異例なのは、景気のよい時代に大幅な値下げをした二つのモデルの方である。その結果として、学習用の鍵盤ハーモニカは学校教育に提供しやすくなり、普及が大幅に進んだ。このことは、鍵盤ハーモニカを小学校に普及させるための楽器製造会社の戦略の一つであったと考えられる。

その反面、音域の広い鍵盤ハーモニカの価格が引き上げられたことにより、合奏向きの音域の広い鍵盤ハーモニカが教育現場から遠ざかった可能性もある。第2章で見たように1960年代前半においてこの楽器は合奏やアンサンブルでリズムや和音も担当できる楽器として使用されていたが、学習用の音域の狭い鍵盤ハーモニカが標準モデルになることによって、「鍵盤ハーモニカ＝旋律楽器」という認識を定着させる要因の一つにもなったであろう。

4. 小学校への本格的な普及

4-1 個人持ちの楽器

鍵盤ハーモニカが個人持ちの教具になったことを明確に示しているのは、1972年5月号の『教育研究』に掲載された鈴木楽器の広告である。ここでは、野外で6人の小学生が笑顔で鍵盤ハーモニカを吹いている

写真が大きく掲載されている（図8）。写真の上には次の文言が添えられている。

「けん盤ハーモニカ メロディオンが全国的に、その教育的価値が認められ、子どもたちひとりひとりの手にもたれるようになってまいりました」⁽¹⁵⁾

これは言うまでもなく、鍵盤ハーモニカが個人持ちの楽器となったことを表している。彼らの表情が明るいのは、努力の末ようやく個人持ちとなったことに対する楽器会社、音楽教育関係者の喜びを表わしたものであろうか。個人持ちになった要因について同広告では次のように続く。

「これは、新学習指導要領『音楽科』の目標のなかで、基礎的能力の育成が重視され、その指導にあたって、けん盤ハーモニカ、メロディオンが効果的であると全国の先生方に認められたからであります」⁽¹⁶⁾

1968年の学習指導要領の改訂の際、「基礎」の領域が新たに設けられたことによって鍵盤ハーモニカが普及したことはすでに先行研究によっても指摘されているとおりである（嶋田2010、山中2016）。基礎とは、木村信之の言葉を借りれば、「リズム、旋律、和声などの感覚を、聴取、読譜、記譜、などの活動を通して鋭敏にすることであり、同時にそれらの活動によって読譜、記譜などの技能をつけることであり、またそれに伴って、楽譜についての理解を深めること」⁽¹⁷⁾である。ソルフェージュの能力を育成するために、基礎能力を育成するために鍵盤ハーモニカを使用することは、現在の音楽教育においても受け継がれており、例えば、音程を確かめたり、階名唱の手助けをしたり、調性の把握、音階を使ったふしづくりなど多くの場面で、鍵盤ハーモニカが用いられている。

しかしながら鍵盤ハーモニカが小学校に普及した背景には、より切実な事情もあったように思われる。それを示唆するのは、『教育研究』1973年8月号におけるメロディオンの広告である。ここには、20名ほどの児童が机上に置かれたメロディオンA-32を演奏している様子が映し出されている（図9）。この写真を通して、鍵盤ハーモニカが個人持ちの教具として使用されていることが分かるが、注目すべきなのは、メロディオンが演奏されている場所である。写真を見る限り、ピアノやオルガンなどの設備はなく、この教室が音楽室ではなく、普通教室であろうことが推測でき

る。このことは、後に述べるように、児童の増加による音楽教室の設備の不足などにより普通教室で音楽の授業を行うようになった1970年代の様子を反映させている。

このように1970年代の広告から読み取れるのは、楽器製造会社が文部省による学習指導要領の改訂や小学校の現状を踏まえた上で、鍵盤ハーモニカの小学校への普及に関わっていたことである。

4-2 児童数の増加と音楽室の不足

楽器製造会社と小学校との連携を裏付けるのが、連載「スズキ メロディオンとともに」である。これは、日本教育音楽協会編の『教育音楽小学版』1969年9月号から1977年5月号まで続いた連載で、メロディオンを採用した小学校が毎号一校ずつ、学校の紹介と共に音楽教育の取り組みを報告したものである。

このシリーズを通読してみると、鍵盤ハーモニカが個人持ちの楽器となった理由には、上述したような学習指導要領の改訂による「基礎」領域の育成に加え、物理的な要因もあったことが窺える。このシリーズ全体の分析は別稿に譲ることにして、本論文では、児童数の増加に伴う設備の不足に関する報告を引用する。

「現在は、児童数一千六百余名で三十九学級である。この児童数の増加に校舎の増加が間に合わず、音楽室も年度により普通教室に転用されてしまう。この結果、鍵盤楽器の指導をどのようにしたらよいかといった問題がでてきた。（中略）この解決策として考えたのが鍵盤ハーモニカである。」⁽¹⁸⁾（名古屋市立高見小学校）

「音楽教室の広さは普通教室の二倍もあり設備も年を追って充実してはいるが、一教室のため、普通教室での授業が多くなるので前項の児童にも個人持ちのメロディオンをひとつずつ持たせるようにしている。メロディオンは非常に手軽であるので、どこでも、いつでも気軽に利用でき、ふしづくりは本校では即興を基本に指導しているので特に便利よく感じている」⁽¹⁹⁾（岡山市妹尾小学校）

「児童数1360名、学級数34クラスのため、音楽室の割当時間の不足や、デスクオルガンも2名に1台のため、鍵盤楽器の指導が重視されながら教育効果の向上が望めなかった。そこで一昨年メロディオンを学校備品として一学級分購入し低学年で使用してみた。

(中略)昨年度は更に一学級分を学校備品として購入し中学年用とし、まい時間相当手荒に取扱われても故障も少なく授業に役立っている。その間に順次個人持ちが増え現在3年生～6年生の全員が持つようになった」⁽²⁰⁾(豊川市立牛久保小学校)

日本では、1971～1973年を頂点として1960年代後半からベビーブームが徐々に始まっていた。上記の報告からは、児童数、学級数の増加に伴い、小学校では音楽室で授業を受けられる機会が減った。その応急処置として鍵盤ハーモニカを個人持ちにして、普通教室で音楽の授業を行っていたという現状が見えてくるのである。

5. おわりに

本論文では、1960年代から70年代にかけての鍵盤ハーモニカ製作の変遷を、音楽教育雑誌『器楽教育』および『音楽教育研究』に掲載された記事や広告を通して分析し、小学校への鍵盤ハーモニカ導入史の一端を解明することを目的とした。

川井勇を始めとする小・中学校の教諭らは、鍵盤ハーモニカの音楽的有用性を高く評価する一方で、楽器の品質向上を課題とした。これを受けて楽器製造会社は楽器の改良に取り組んだ。一連の広告を分析した結果、各メーカーは、様々な音域の鍵盤ハーモニカのなかから小学校低学年の学習用楽器を販売の中心に据え、特定のモデルのみ価格を下げるという戦略によって小学校への鍵盤ハーモニカ導入を促したことが明らかになった。

1967年に文部省から教具と認められ、翌年、学習指導要領の改訂で「基礎」の領域が作られた際、基礎の育成のために有効な楽器として、鍵盤ハーモニカが全国の小学校に普及した点は、すでに先行研究によって明らかにされているが、本研究では、それに加えて児童数の急激な増加と音楽室の設備の不足が、鍵盤ハーモニカが個人持ちの楽器となった背景にあることを指摘した。これらの点から導き出されるのは、鍵盤ハーモニカの小学校への導入に楽器製造会社が重要な役割を果たしたことである。楽器の改良や小学校との連携がなければ、個人持ちの楽器となることはできなかったであろう。

鍵盤ハーモニカが小学校高学年の教科書に採用されたのは1970年代、小学校低学年は1980年代だった(嶋田2010)、実際には、それらよりもかなり早い

時期から全国の小学校に個人持ちの楽器として鍵盤ハーモニカが導入されていたのではないかと、という新たな仮説が本論文によって導き出された。つまり、教科書に掲載されたがゆえに鍵盤ハーモニカが全国に普及したというよりも、それ以前からすでに多くの小学校で取り組みが行われ、その反響が次第に大きくなっていったことから教科書掲載に踏み切ったという方が実態により近いのではないかと。それゆえ今後は、鍵盤ハーモニカが個人持ちの楽器として小学校に導入されるまでの動向をさらに詳しく調査することを課題としたい。

【資料編】



図1「新しいピアノカもサッソウと登場」
『器楽教育』1962年8月号



図2「吹奏楽器のニュー・フェース ピアノホルン」
『器楽教育』1962年2月号



図3「学習効果 満点!! の新製品 ピアノカ」
『器楽教育』1962年4月号



みんなに鍵盤楽器を!!

スズキ メロディオン M-36 S-34

M-36 (f~d' 36鍵)
S-34 (f~d' 34鍵)

- 音がすばらしい。
- タンギングの容易さと表現力の豊かさはメロディオンだけを持つ特性です。
- 吸口を交換すれば、行楽用・卓上用にもご使用いただけます。
- 何処でもすぐ演奏が出来ますから、練習曲、作曲用としても、活躍の場が広がります。

第三回全日本リード合奏大会コンクール出場10校の半11校がメロディオンをご使用、例れもすばらしい成績をあげました。

M-36 ケース付 ￥5,350
S-34 ケース付 ￥3,500

スズキ楽器製作所
浜松市彌家町443

図4 「みんなに鍵盤楽器を!!」
『器楽教育』1963年11月号

ヤマハ ピアニカ 22
《新発売》



- 幼稚園の鼓隊でも——
小学校低学年の合奏でも!
- 幼児のかわいい顔からもめらかな旋律が流れます——
ふりない指はこびりできるような設計だからです。
- 柔らかいソップからも十分な音量が溢れます——少ない呼吸量で豊かな響きを実現する設計だからです。
- 決してくたびれませんか——
楽譜を支える形も備えた上に、極めて軽量だからです。
- 22鍵! オクターブまで (c~b) の音域は小学校の音楽教材演奏にも十分です。
- 内部設置の吸口、空気路からよくよくで柔らかい音色が生まれます。

ヤマハ ピアニカ 22
¥ 2,350 (ケース付、送料別)

●カタログをご覧ください ● **日本楽器製造株式会社**

図6 「幼稚園の鼓隊でも小学校低学年の合奏でも!!」
『音楽教育研究』1967年8月号

メロディオンのリードは抜群!!

弊社研究陣のなやまね研究の結果、ついに新リードの開発に成功し、すでに各種のメロディオンに採用しています。
新しいリードは、錆びない、折れない、すぐれた弾性の三大特長をもっています。

とても鍵盤が見やすくなった
新製品 M-25
f~f'

器楽教育用/ケース、パイプ付 ￥2,800

A-27 アルト g~a'
S-27 ソプラノ g'~a'

器楽教育用/ケース、パイプ付 ￥3,500

M-36 f~a'

器楽教育用・ホームアンサンブル用/ケース、パイプ付 ￥5,350

株式会社 **鈴木楽器製作所**
浜松市彌家町443 TEL. 3-9614, 2325

図5 「メロディオンのリードは抜群!!」
『音楽教育研究』1966年5月号

スズキ メロディオン スタディ <25>

ハンディタイプな学習楽器

- 品質、性能共に充実した教育的機能に優れた鍵盤楽器です。
- 机上でオルガンと同様に鍵盤を見ながらの学習が可能です。
- 完全なハーモニーを出し、ブレンディング・タンギング等のテクニックの学習に役立ちます。
- 新しく開発されたリードは①錆びない②折れない③優れた弾性のメリットを持っています。

メロディオン・スタディ <25>
¥ 1,980



株式会社 **鈴木楽器製作所**
浜松市彌家町443 TEL. (0534) 61-2325 20

図7 「ハンディタイプな学習楽器」『音楽教育研究』
1969年9月号



図8『音楽教育研究』
1972年5月号



図9『音楽教育研究』
1973年8月号

【引用文献】

- (1)『器楽教育』第5巻第6号, p. 11, 1962
- (2)『器楽教育』第6巻第11号, p. 17, 1963
- (3)『器楽教育』第6巻第11号, p. 16, 1963
- (4)『器楽教育』第6巻第11号, pp. 17-18, 1963
- (5)『器楽教育』第8巻第3号, p. 9, 1965
- (6)『音楽教育研究』第9号, p. 26, 1966

- (7)『音楽教育研究』第53号, 頁付けなし, 1970
- (8)『音楽教育研究』第1号, 頁付けなし, 1966
- (9)『音楽教育研究』第28号, 頁付けなし, 1968
- (10)『音楽教育研究』第42号, 裏表紙, 1969
- (11)『音楽教育研究』第52号, 裏表紙, 1970
- (12)『音楽教育研究』第8号, 頁付けなし, 1967
- (13)『音楽教育研究』第16号, 頁付けなし, 1967
- (14)『音楽教育研究』第43号, 頁付けなし, 1969
- (15)『音楽教育研究』第73号, 頁付けなし, 1972
- (16)『音楽教育研究』第73号, 頁付けなし, 1972
- (17)『音楽教育研究』第28号, p.63, 1968
- (18)『教育音楽小学版』第28巻5月号, 頁付けなし, 1973
- (19)『教育音楽小学版』第28巻9月号, 頁付けなし, 1973
- (20)『教育音楽小学版』第28巻11月号, 頁付けなし, 1973

【参考文献】

- ・榎下達也「戦後日本における器楽教育成立史の一側面——新生音楽教育会の設立(1947年)とその役割」『音楽教育史研究』音楽教育史学会学会誌17, pp.1-12, 2014
- ・榎下達也「戦前から戦後にかけての音楽教育研究団体の系譜——器楽教育成立史研究の視点から」『教育科学論集』17, pp.1-9, 2014
- ・榎下達也「日本器楽教育連盟の設立(1956年)とその音楽教育史上の位置」, 『神戸大学研究論叢』21, pp.29-42, 2015
- ・島崎篤子「1960年代の学校教育における創作活動——わらべうたとふしづくり教育に着目して——」, 『文京大学教育学部紀要』46号, pp. 115-134, 2013
- ・嶋田由美「戦後の器楽教育の変遷——昭和期の「笛」と「鍵盤ハーモニカ」の扱いを中心として(特集〈学校器楽教育の過去・現在・未来〉)」『音楽教育実践ジャーナル』日本音楽教育学会, pp. 15-25, 2010
- ・前間孝則, 岩野裕一『日本のピアノ100年—ピアノづくり に賭けた人々』, 草思社, 2001年.
- ・山中和佳子「日本の学校教育における鍵盤ハーモニカの導入」, 『福岡教育大学紀要』65, pp.17-24, 2016
- ・山本美紀, 筒井はる香「初等教育における鍵盤ハーモニカ学習の役割」, 『奈良学園大学紀要』第5集, pp.1-10, 2016

(Endnotes)

- 1 本論文では、メロディカ（ホームー）、ヤマハピアノカ（日本楽器）、メロディオン（鈴木楽器製作所）、ピアノホーン

(トンボ楽器)などの金属リードを鳴らして発音する鍵盤楽器を総称して「鍵盤ハーモニカ」とする。

- 2 『器楽教育』は、1966年4月から『音楽教育研究』に改題され、発行元が日本器楽教育連盟から音楽之友社に変更された。
- 3 『器楽教育』第5巻第8号、頁付けなし、1962
- 4 前掲書、第7巻第8号、頁付けなし、1964
- 5 例えば、ハーモニカ学習の弱点を取り上げた記事に『器楽教育』第6巻第1号「特集 旋律楽器のつまづきとその解決策は!」、pp. 6-7、同誌第6巻第5号「旋律楽器における児童のつまづきとその対策」、pp. 22-23 などがある。
- 6 前掲書、pp. 19-20.
- 7 例外的に鈴木楽器のメロディオンのみ1頁全体が使用されている。
- 8 ピアノホーンは1963年の時点で製造停止になっていた。『器楽教育』第6巻第11号、p. 16を参照。
- 9 『音楽教育研究』、第5巻第4号、頁付けなし、1962
- 10 前掲書、第6巻第6号、頁付けなし、1963
- 11 前掲書、第18号、頁付けなし、1967
- 12 M-25とA-27には「新発売」と書かれていないため1966年以前から作られていた可能性もある。
- 13 前掲書、第16号、頁付けなし、1967
- 14 前掲書、第41号、頁付けなし、1969
- 15 現在の初等教育における鍵盤ハーモニカの役割と問題点については、山本美紀・筒井はる香「初等教育における鍵盤ハーモニカ学習の役割」、『奈良学園大学紀要』第5集、pp. 163-172、2016を参照のこと。